むかし琵琶湖で鯨が捕れた

河合隼雄
中西進
山田慶兒

でしょうか。【中略】 **山田** 【中略】どんなものもある意味で葛藤がなくなっていくというところが日本の話にはあると思うんです。例えば世界の白鳥伝説にはものすごく葛藤があるわけでしょう？【中略】そういうのが羽衣伝説では全部消えています。……

河合 西洋人は葛藤を論理的に解決しようとする。【中略】アメリカの友人が「日本人は葛藤を美的に解決する」と言っていました。……

むかし琵琶湖

河合隼雄
中西進
山田慶兒

江苏工业学院图书馆
藏书章

むかし琵琶湖で鯨が捕れた
定価1200円（本体1165円）

1991年4月15日　印　刷
1991年4月25日　発　行

著　者　河合隼雄
中西　進
山田慶兒
発行者　富岡勇吉

〒102　東京都千代田区飯田橋3の1の3
発行所　株式会社　潮出版社
電話03(3230)0781(編集)振替東京5-61090
03(3230)0741(営業)

印刷・明和印刷　付物・栗田印刷　製本・東京美術紙工

落丁・乱丁本はお取替えいたします。販売窓口あて御郵送下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。
© H. Kawai, S. Nakanishi, K. Yamada, 1991 Printed in Japan

ISBN 4-267-01254-7 C0095 P1200E

むかし琵琶湖で鯨が捕れた／目次

むかし琵琶湖で鯨が捕れた　前口上　7
日本の英雄はだまし上手　悪　27
〝男は人間、女は神様〟　女と男　47
カラスは太陽のシンボル　動物　65
古代人の言葉のわざ　地名　83
鏡の神通力　常陸風土記　101
温泉ブームのルーツを探る　出雲風土記　119
「犬」は鉄を発見した人の名前　播磨風土記　139
火の国・九州のいわれ　豊後・肥前風土記　159

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

台風は富をもたらす神の風　逸文　179
風土記三題噺　名前・伝説・地名　199
さまざまな「昭和」あの日あの時　風土記番外篇　219

装丁・鈴木一誌

むかし琵琶湖で鯨が捕れた

むかし琵琶湖で鯨が捕れた

前口上

河合　私は前から日本の古典の一つを専門の違う者が読んで話し合うということをやりたいと思っていたんですが、とくに風土記を選んだのは、実にいろいろなことが入っているからなんです。異なったアングルから見ていくのにふさわしい。天文・人文の方から見られてもおもしろいし、私の方だったら、例えば伝説がたくさんありますので、それを見るだけでおもしろい。中西さんの場合は国文学ですから、文字とか文章などでも随分おもしろいことがあると思うんです。それでも何とか焦点をしぼって見るということをしたいんですが、とりあえずそういう雲をつかむようなところから始めたい。山田さん、中国にも風土記があるそうですね。

山田　日本の風土記は、もちろん中国の風土記を手本にしたのだと思います。ざっと調べてみたら、中国では晋代から清代に至るまでに風土記と称するものが二十いくつありました。もっとあるかもしれませんが、一番古いのは西晋（せいしん）の周処（しゅうしょ）が書いた『風土記』です。

以後、唐、宋、元の各時代にもあり、とくに清朝になって非常にたくさん書かれています。これは明らかに外国に対する関心が高まった結果だろうと思います。明末からジェスイットの宣教師が来て、ヨーロッパ、アメリカ、その他世界各地のことを伝えるようになる。もちろん、それ以前からシルクロードなり南海の貿易の道なりがあって、ある程度のことは伝わっているわけだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

けれども、急に世界が広がることによって多くの風土記が書かれるようになった。

河合　なるほど。

山田　しかし、そういう外国に対する関心だけから風土記が書かれたわけではありません。周処が書いているのは故郷のことなんです。

『日本風土記』というのも、清末に書かれています。『風土雑録』のように風土という言葉を使った本ならまだほかにもあります。

さて、周処の『風土記』は、清末に輯本が作られ、「陽羨風土記」と題されています。周処という人については『晋書』に伝がありまして、お父さんが三国・呉の太守をやっていて、呉の国で育っているんです。二四〇年に生まれて二九七年に死んでいる。当時の呉は後世のような文化の中心地ではなかった。陽羨は今日の江蘇省の宜興県に当たるところで、太湖を挟んでちょうど蘇州の対岸になります。その地方のことを書いたのが『陽羨風土記』です。これにはいわゆる自然地理的なことも書いてあって、霊験あらたかな泉があるとか、地に大きな穴があって洞庭湖に通じているとかいう話もあるんですが、非常に目立つのは地名の由来がほとんどないことです。これは日本の風土記と著しい対照をなすのではないでしょうか。

中西　そうですね。

山田　一つだけ、餘姚というのは河東のあたりに姚というところがあるからそう呼ぶという記事があります。河東は黄河が南流している東側、山西省西部の地名です。

この風土記のおもしろいところは、風俗習慣の記載が非常に多いことでしょう。例えば、初め

て会ったときは、頭巾を取り、腰に下げている刀を取って相手に渡してから、あいさつをする。これからつき合おうというときは、壇をつくって、白い犬を一匹と赤い鶏を一羽とキジを三羽、ちゃんと供えてお祭りをする。神の前で誓いをたてるんでしょうな。将来おまえさんが車に乗って町を通るような身分になり、おれは貧乏ですたこら歩いていても、会うたら、ちゃんと車をおりるんだぞ、というような約束をやる。（笑）

酒を飲んで宴会をやるときは、鼓槃という一尺六寸ぐらいの大きさの太鼓みたいなものを抱えておなかにつけて、右手の五本指で弾きながらリズムをとる。遊びとしては撃壤というのがありますし、お祭りの後でやる遊びもあります。それから梅雨の話、端午の節句のちまきの話もあります。

河合　端午という言葉があるんですか。

山田　あります。五月五日、菰の葉で米を包んで煮て食べる。

中西　屈原（楚の王族。おとろえかけている国勢をもり返そうと努力したが、反対派の讒言によって退けられ、汨羅の淵に身を投げて死んだ）に供えたわけですね。

山田　はい。それから、このときは亀も煮て、骨を取って、塩などで味つけして一緒に食べたようですな。日本にはないことです。また、ヨモギを戸口にかけておいて、邪鬼をはらった。

七夕の祭りもあります。その晩は庭を掃除して、水をまいて、そこにむしろを出して、酒とさかなを置いて、河鼓と織女を祭る。河鼓は牽牛のことですが、この二つが当日会うわけです。

河合　「会う」と書いてあるんですか。

山田　「當會（まさにあわんとす）」と。天の川を見ていると奕奕たる白い気が流れて光り輝くとき

がある。そのときにちょうど星があいびきをやっているんですな。で、その兆しを見たらすぐ願いごとをかける。金持ちになりたいとか、長生きしたいとか、子供が欲しいとかですね。ただ、二つの願いごとをしてはいかん。一つしかいかん。それから、三年間は何を願かけたか黙っておかなくてはいけない。三年たったらはじめてしゃべってもよろしい。

九月九日は真っ赤に熟した茱萸、つまりカワハジカミをかんざしに挿す。これも悪鬼を払うためです。

河合　日本にこんなのはないでしょう。

中西　植物をかんざしに挿すのはふつうですが、茱萸を九月九日に挿すのはないですねえ。唐の王維の詩には「遍く茱萸を挿すも一人を少かん」というのがありますから、中国では普通の習慣でしょう。

山田　珍しい食い物の話もありますし、伝説もあります。鯤の話、これは例の『荘子』に出てくる大魚です。長さが数千里あって、すみかである海の穴の中に入ったら水があふれて満ち潮になり、穴を出ると引き潮になる。その前に鯨鯢というのがありますが、これも同じです。穴からの出入りが潮の満ち干になる。

河合　日本の風土記にも鯨のことが出てきます。やっぱり鯨は大事だったんですかなあ。

中西　日本の名前だと勇魚でしょ？　勇ましい魚。「勇魚捕り」なんていう枕言葉にもなって、琵琶湖を修飾するのに使われている。これは「鯨だって捕れるほど立派な琵琶湖」という表現です。

山田　元日には長幼衣冠をただして、まず拝賀して、椒酒を飲んで、次に桃湯および柏葉酒を飲むという記事もあります。

河合　三世紀の後半にすでに端午の節句とか七夕祭りがあったというのはすごい。日本はそういう概念をいつごろ輸入したんでしょうねえ。

中西　七夕が天武朝なのか、それとも聖武朝なのかというのは学者の間で大問題です。史書の記事としては聖武朝の天平六年（七三四）しか出てこないんだけど、『万葉集』の巻第十の七夕の歌の注には庚辰の年というのがあって、これが天武九年（六八〇）に当たるんです。

河合　端午の節句はどうですか。

中西　推古十九年ともう一つ額田王の歌で有名な蒲生野の狩りが端午の節句です。五月五日に野原へ行って薬草を取る。ですから、七世紀の初めには入っていたんでしょう。

山田　それは留学生なんかが持ってきたんでしょうか。

中西　七夕は民間の流れのなかで入ってきたんじゃないかという気がします。

河合　ほう。

中西　そうじゃなくて遣唐使などもっと上層部の人間が取り入れたんだという説もあります。だけど、民間の交流を無視して文化交流を考えるのは不十分ではないでしょうか。

山田　それはそうですね。

中西　中国で七夕には乞巧奠という機織りの祭りがありました。そして、機織り集団はかつて日本にたくさん来ていますね。

山田　呉のほうからね。

中西　ええ。今日の服部さんの祖先です。だから、七夕はそういう集団が持ってきたのではないか。文献にだけ頼って考えるのは間違いではないか。ただ、証拠がないので困るんです。

とにかくそういう年中行事というのは随分あって、例えば『万葉集』の一番最初の歌は人日（じんじつ）、つまり陰暦一月七日の歌、次が春の国見、その次が端午の薬狩りの歌というふうに、歳時記みたいに並んでいます。古代には『陽羨風土記』に見られる関心と似通うものがあったんでしょうね。

ところで、中国古代の地理書『山海経（せんがいきょう）』が土地のことをよく書いてあるのに対して、『陽羨風土記』は風土記といいながら非常に人事に関心が強いですね。「風土」という言葉の概念のなかにはそういう区別がやっぱりあるんでしょうか。

山田　そうでしょうね。風と土ですから気候と土地、風記と土記でしょうけれども、後者には単なる自然環境ではなくて、その土地での人の営みということが入ってくるんだと思います。元、モンゴルの時代に書かれた『眞臘（しんろう）風土記』、つまりカンボジアの風土記の目次を見てみますと、総叙というのがあって、その後に城郭、宮室、服飾、官属等々四十の項目が挙がっています。これぐらいの範囲を記述するのが風土記だと考えていただいたらいいと思うんです。

中西　例えば農事暦の一種である月令（がつりょう）は自然の運行がベースになっていますが、そのうえにカワウソを祭るとかなんとかいうような人事が入っていますよね。

河合　本当にこういう記録を残してくれているからおもしろいですね。

山田　月令の場合は、天文学的な事柄をベースにして気象学的な現象をまとめ、あと、物候（ぶつこう）と言

いますけれども、生物がそれぞれの時期にあらわす特色みたいなものを配列していく。具体的な自然現象を媒介にして見た暦をつくろうという意図、一般化しようという意図が明らかに見えます。

それに対して『陽羨風土記』の場合は、同じように季節と結びついた行事を描いているとはいえ、むしろその地方全体を一つの非常に特色あるものとしてつかみ出そうという意図があるんじゃないでしょうかね。

中西　生活とか人間の温かみとかいう方に視点が向いている。

山田　周処は、もともとは陽羨の人なんでしょうけれども、父の任地で育ち、成人してからは晋につかえて各地の太守をやったり、洛陽で高官になったりしている。その眼で故郷を見る。その興味が彼にこれを記述させることになったんでしょう。

河合　なるほど。日本の風土記は、同じく風土記と銘打っているけれども、だいぶ感じが違うようですが。

山田　日本のは官撰ということが一つの性格をつくっているように思います。

中西　何々を書けという命令が出るわけですが、そのなかには人間の生活などないです。だから、最初から違う。せいぜい産物、地味、地名の由来、古老相伝のこと、これが一番おもしろいんですが、それから土地にいい名前をつけることぐらいです。

河合　習俗などはみんなわかっているわけだから、それよりも朝廷が全部支配するために、一体どういう地形で作物がどのくらいできてということの方を調査した。風土記官撰は一種の国勢調

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com